

主 題：私の名はユダ

聖書箇所：ユダの手紙 1-2 節

聖書の「ユダの手紙」をお開きください。私たちは過ぎる日、ペテロの手紙第二を学びました。その学びをしている時にこの「ユダの手紙」をすぐに学ぶ必要があると思いました。なぜなら、この二つの手紙は非常に関連しているからです。「ユダの手紙」は25節しかないのですが、その内の19節がペテロの手紙第二と関連しています。

◎書かれた年代

この二つの手紙は、先にペテロの手紙第二が記されて、その後「ユダの手紙」が記されたようです。なぜそのように言えるか？ペテロ手紙第二では「あざける者が出て来る」ということが未来形で書かれていて、ユダの手紙でそのあざける者ども、偽教師たちや異端を持ち込む者たちですが、彼らがすでに来たことが現在形で書かれているからです。

また、ユダの手紙17、18節に「:17 愛する人々よ。私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。:18 彼らはあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現れる。」」と書かれています。これはⅡペテロ3:3でペテロが「まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、」と語っていることです。ですから、ペテロが語り、そして、それが成就したとユダが教えるのです。恐らく、この「ユダの手紙は」ペテロが殉教した後、紀元（AD）70年にエルサレムが陥落しますが、このエルサレムの神殿が崩壊するその前、AD68年のペテロの殉教から70年の間に記されたと言われます。

◎書かれた事情

ではなぜ、私たちはこの手紙をこれから学んでいこうとするのか？それはペテロと同じように、世の終わりに生きている私たちクリスチャンが、ペテロが教えたように偽りの教師たちの偽りに惑わされないためにです。ペテロが教えたように、そして、ユダも教えてくれるように、いろんな偽りの教え、偽りの教理を持った人たちが教会に中に入って来ます。そして、彼らは神のみことばに反することを教えるのです。人々を惑わすのです。ですから、私たちはどんな教えが入って来ようと、それに惑わされないためにしっかりとこのみことばを学ぶことが必要です。

また同時に、パウロがコロサイの教会に語ったように、「ほうびをだまし取られないために」です。コロサイ書2:18「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、」、しっかりと真理に立つことです。一生懸命主に仕えて来たのに、最後になって、惑わされて真理から外れてしまうようなことがあるならそれは悲しいことです。ですから、私たちはしっかりと聖書が何を教えているのか、警告のメッセージとも言えるこの手紙を学ぶことが必要なのです。

◎手紙の差出人

1節「イエス・キリストのしもべであり、ヤコブの兄弟であるユダから、…」と、ここに「著者」、この手紙の差出人が明らかに記されています。「ヤコブの兄弟であるユダから、」と。「ユダ」だと書かれていますが、どの「ユダ」でしょう？新約聖書には「ユダ」という名前の人物が5人出て来ます。その中のだれかです。5人のユダとはだれでしょう？

(1) **イスカリオテのユダ** : イエス・キリストを裏切ったユダです。彼自身が信仰者でない以上、彼がこの手紙を記すことは有り得ません。

(2) **ダマスコの町にいたユダ** : 覚えていますか？パウロがより多くのクリスチャンたちを捕えて迫害しようと思ったのがダマスコでした。その途中で、復活の主に出会ってパウロは信仰に至るわけです。彼はその後ダマスコに引いて行かれるのですが、彼がダマスコにいた時に、アナニヤという一人の信仰者が彼の所に遣わされて来ます。その当時の様子が使徒の働き9章に記されています。9:10、11「:10 さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ」と言われたので、「主よ。ここにおります」と答えた。:11 すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。」、ダマスコに行ったパウロはユダという人の家にいたのです。そして、そこにアナニヤがやって来るのです。この二人目のユダ、恐らく、彼もこの手紙を書いた人物ではないでしょう。

(3) **バルサバと呼ばれる預言者ユダ** : 異邦人がユダヤ人と同じようにこの救いに与ったということで、では「どうしたら良いのか？」と初めてのクリスチャンたちの会議が開かれました。これがエルサレムで行われたので「エルサレム会議」と呼ばれ、使徒の働き15章にそのことが記されています。この会議で決まった決定事項をアンテオケの教会に届けようとする訳です。そこでこのエルサレム教会がその務めにだれを任命したのか？使徒15:22「そこで使徒たちと長老たち、また、全教会もともに、彼らの中から人を選んで、パウロやバルナバといっしょにアンテオケへ送ることを決議した。選ばれたのは兄弟たちの中の指導者たちで、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスであった。」、この15章を見ていくと、この後31節には、実際にアンテオケにエルサレム教会からの手紙を託す訳ですが、そこで人々がそれを読み励まされたと書かれています。「それを読んだ人々は、その励ましによって喜んだ。」と。そして、次の32節に「ユダもシラスも預言者であったので、…」と、この二人は預言者であったと書かれています。「預言者」とは幻を見てそれを語るのではなくて、神のことばを語る者です。そこでユダとシラスは「…多くのことばをもって兄弟たちを励まし、また力づけた。」とあります。ユダという指導者がいたことが書かれています。

(4) **十二使徒のユダ** : 次は、十二使徒の一人ユダです。ルカは十二使徒のリストを上げています。ルカ6:16には「ヤコブの子ユダとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。」と書かれています。また、同じルカが記した使徒の働き1:13にも「彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党員シモンとヤコブの子ユダであった。」とあります。福音書でもマタイとマルコには「ヤコブの子ユダ」とは記されていません。そこには「タダイ」と記されています。別人ではありません。恐らく、「ユダ」が本名で「タダイ」は家族の中で使われていたニックネームだと言われます。少なくとも、十二使徒の中にユダが二人いたのです。一人はイスカリオテのユダで、もう一人がこのヤコブの子であるユダでした。ヨハネの福音書では使徒たち12人の名前は出て来ませんが、ヨハネ14:22には「イスカリオテでないユダがイエスに言った。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」と「イスカリオテでないユダ」という表現がされています。

(5) **イエス・キリストの兄弟であったユダ** : イエスが生まれ育ったナザレの町に行った時に人々はイエスのことをよく知っていました。そのことはマルコ6:3、マタイ13:55に記されています。マルコ6:3「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。こうして彼らはイエスにつまずいた。」と。マリヤから生まれた子どもたちのことです。また、ここには「妹たちも」と書かれており、女の子も生まれていたことを知ります。このユダの手紙を書いたのは、この最後に紹介したイエス・キリストの兄弟であるこのユダであったらうと言われているのです。

なぜなら、1節を見ると「ヤコブの兄弟であるユダから」と書かれているからです。ヤコブ、先に見たマリヤから生まれた男の子の中に「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン」と記されていました。このヤコブという人物は使徒の働き15章を見るとエルサレム教会の指導者であったことが分かります(15:13-21)。非常に霊的な人物でした。恐らく、ユダもそのエルサレム教会にいたのでしょうか、そして、ここで自分のことを「ヤコブの兄弟である」と記しているのです。

少し疑問に思うのは、彼は自分のことを「ヤコブの兄弟」であると言いました。確かにそうです。では、マリヤから生まれた男の子の中には自分もいるしヤコブもいた。そして、主イエスもおられたのです。ところが、ユダは主イエス・キリストに関して自分のことを「イエス・キリストのしもべであり、」と言っています。主イエスと自分の関係をこのように表わしています。ヤコブとの関係は自分の兄弟だと言った。イエスに関して自分の兄弟だと言うことができました。ナザレの人はみなそう言っていました。でも、ユダはそう言わなかったのです。なぜなら、はっきりしています。ユダは確かに同じ母から生まれ、幼い頃からずっといっしょに育って来たこのイエスが、すべてを造られた唯一真の神であり、約束されていた救世主であることを知っていたからです。だから、彼は自分のことを「イエス・キリストのしもべである」とこのように自分のことを表わしたのです。でも、このことは私たちクリスチャン一人ひとりも全く同じ関係を持っています。私たちもイエス・キリストのしもべです。クリスチャンであるなら「あなたはイエス・キリストのしもべ」です。

そして、詳しい説明はしませんが、この「しもべ」ということばは「奴隷」という意味です。奴隷であるから、自分の主人を喜ばせること、そのことだけを目的にすべてのことをするのです。私たちはそのように生きるのです。主人である主に喜んでいただくこと、そのことだけを目的に生きている人た

ち、それが私たちクリスチャンです。まさに、ここでユダが「私はイエス・キリストの奴隷だ」と言ったとき、彼がどんな思いを持って信仰者として生きていたのか、そのことを見て取ることができます。彼が願っていたことは、このイエス・キリストの前を正しく生きることです。このイエス・キリストが喜ばれることを為していくことです。この方のみこころに従って行くことです。なぜなら、このイエスは私の主人だからです。私の神であり、私の救い主、私の主人であって私の責任はこの方の命じることに従順に従っていくことだと言います。皆さんご存じのように、それが私たちクリスチャンです。私たちはこの神に仕える者として生まれ変わったのです。そして、あなたも神の奴隷としてこの神に従っておられるはずで

皆さんに考えていただきたいことは、このことをよく考えないとただ何となく同じことを継続することに陥ってしまうということです。私たちは主のしもべとして奴隷として主に従っていくのですが、問題は、どのような心で従っているのか、どのような心で神を喜ばせようとしているのかということです。私たちの心の状態です。同じことを繰り返すのですが、そのすべてが神に喜ばれるとは決して言えません。神がお喜びになるのは、私たちの心が正しいときです。

☆どのような心で主に従っていかうとするのか？

このことは非常に大切なので皆さんに見ていただきたいと思います。これはパウロが地上の奴隷たちに対して、—その当時多くの奴隷がいた訳で—、彼らに与えたアドバイスの中でどのような心で仕えるべきなのかを教えています。エペソ人への手紙6章5節から奴隷たちに対する教えがあります。エペソ6：5「奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。」、ここに「恐れ」「おののいて」「真心」と三つの名詞が記されています。

(1)「**恐れ**」：「怖がる」という意味がありますが、どちらかというと、これは「畏敬、尊敬の念」です。尊敬をもって従っていきなさい、尊敬をもって従い仕えていきなさいという意味です。

(2)「**おののき**」：「震える、恐くて震える、恐れおののく」ことです。

(3)「**真心**」：「見せかけでない、裏表のないこと」です。神を愛するからそのためであれば犠牲を厭わないという思いです。

6節には「人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行い、」とあります。皆さん、パウロは地上の奴隷たちに対して、あなたがたの主人にこのような心をもって従うようにと教えました。でも、よく見ていただくと「あなたがたは、キリストに従うように」と書かれています。まさに、あなたがたはキリストに従うように、その同じ思いをもって地上の主人に従いなさいと書かれています。パウロが教えていることは、私たち信仰者がどんな思いをもって、奴隷として主人である私たちの主イエス・キリストに、神に従っていくのか？そのことがここに記されているのです。私たちは畏敬の念をもって深い尊敬の思いをもってこの方に仕えるのです。この方は神であられるから、そのようなリスペクトをもって従っていくのです。恐らく、多くのクリスチャンはそのような歩みをされているでしょう。少なくとも、そのように生きようとされているはずで

では、二つ目はどうですか？まさに、「恐れおののく」という思いです。もしかすると、いつの間にかその思いが私たちに欠けてしまっている可能性がありますか？イザヤは神の前に立った時に「私はもうだめだ」と言っています。大変な恐れを抱きました。「私は聖い神を見たから」と言った彼は大変な恐れを抱きました。モーセもそうです。神の前に立つことがどれほど恐ろしいことがわかります。

皆さん、私たちの神は私たちが何を考えているか、何を思っているか、どんな思いを心の中に秘めているか、全部見ておられます。どんなに信仰的だと振る舞って見せても、神は私たちの心をご覧になっています。それを考えるだけで恐くありませんか？私たちはこの方の前に立つのです。あなたのすべてのことを知っておられる神の前に立つのです。私たちが神に対してもつべき心からの正しい態度、この方は神なのです。たとえ、私たちのことを「友」と呼んでくださったとしても、私たちにとってはこの方は神であって恐れるべき存在です。もし、このことを私たちが失ってしまうなら、私たちは自分勝手な生き方をするかもしれません。神の目が常にあなたや私の心に注がれている、常に神の目がそこにある。いつの間にか、私たちはそのような「恐れる、怖がる」という思いを失ってしまっているかもしれません。でも、その思いが必要だとみことばは教えてくれます。そして、私たちは心から主に従っていくのです。ご自分の心をチェックしてください。そんな思いをもってあなたは主に従おうとしているかどうか？毎日そのような思いをもって歩んでおられるかどうか？です。

あなたも私もイエス・キリストの奴隷です。パウロもペテロも、そして、テモテも「キリストの奴隷だ」と言っています。ピリピ1：1「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、」、Ⅱペテロ1：1「イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、」と、このように私たち信仰者は

みなキリストの奴隷なのです。かつて私たちはサタンの奴隷として罪の奴隷として生まれて来ました。私たちはこの主人を喜ばせることしかできなかった。創造主なる神を喜ばせることは私たちには不可能でした。でも感謝なことに、神は私たちを生まれ変わらせてくださった。神の恵みによって私たちを生まれ変わらせてくださったのです。

最後に一つ質問ですが、★あなたは神の奴隷、主の奴隷とされたことを特権であると喜び、この特権を誇っていますか？

あなたはどのように神の奴隷とされたことを神に感謝していますか？もしそうでないとなれば、どこかに問題があるのです。私たち信仰者がこのような素晴らしい祝福に与るために、神はどれほど大きな犠牲を払ってくださったのか、そのことを覚えていなければ、私たちのささげる礼拝も恐らく形式的なものかもしれません。見かけは非常に心からなる礼拝をささげているかもしれない。でも、神が期待しているのは、神が命じているのは、心から溢れ出てくる喜びであり感謝です。それが神にふさわしいささげ物です。礼拝に来ていても、カインのようではありませんか？アベルのように自分から喜んで感謝をもって主を礼拝するために来ているかどうか？ユダは私たちに、彼自身がどんな信仰者として生きているのか、そのことを教えてください。私たちひとり一人も、自分の動機というものを探ることです。私たちはこうしてみことばを学んでいるときに、自分の心を探るチャレンジがあると思います。大切なことです。どうか、今、見たこと、また聞いたことをぜひご自分に問いかけてみてください。

◎手紙の「宛先」

次に、だれに対してこの手紙が送られたのか、手紙の宛先が書かれています。1節の後半に「…父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている、召された方々へ。」とあります。実は、この箇所の文頭は冠詞で始まっています。そして、最後は「召された」という形容詞で動詞として使われています。なぜこのような文脈で記したのか？こう説明ができます。恐らく、ユダはクリスチャンとはどういう人たちなのか、まず、その定義をします。「クリスチャンとは神によって召された者たちである」と。そのことを強調した上で、二つの説明を加えて、よりクリスチャンを詳細に説明しています。クリスチャンは神によって召された者たちで、同時に、彼らは「父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている」者たちであると。1節はこのように私たちを教えています。

・「召された」：ユダはここでこの救いというのはすべて神主導の恵みだと言っています。神があなたを選んでくださった。世界を造る前から神はあなたを選んでくださり、そして、あなたに福音のメッセージを聞く機会を与えてくださり、あなたの心に働いて罪を悟らせてくださって救いが必要であることを悟らせてくださり、そして、あなたの頑な心を開いてくださって救いへと導いてくださった。これが神があなたのために為してくださった救いのみわざです。ですから、私たちクリスチャンとは、神の目的に沿って神に仕えるために罪の中から呼び出された者たちです。罪の中にいた私たちを神が名指しでそこから呼んでくださったのです。何のために？神に仕えるためにです。

ローマ書1：7に、この「召し」に関してパウロはこのように教えています。「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたにたのみにありますように。」「召された聖徒たちへ。」とあります。この「召される」ということに関して、パークレーが大変興味ある大切なことを記しているので紹介します。「聖徒として召されることは、常人と違った者として召されることである。この世には世の基準や価値観がある。キリスト者の生活にとってはキリストこそ唯一の基準なのである。そして、人生の唯一の価値はキリストに尽くすことにある。これがキリスト者生活と他との相違である。」と。

皆さん、先ほど説明したように、「救い」というのは神があなたのうちに働き、罪の中から罪の深み、汚れの中から神はあなたを呼び出してくださった。そして、神はあなたをご自身の目的に沿って使ってくださいなのです。ローマ1：17で教えているように「召された聖徒たちへ。」と言ったときに、神があなたを罪から呼んでくださった、罪から召してくださった、それはあなたがこの世の他の人々、神に逆らっている人たちとは全く違う者として生きるためなのです。なぜか？私たちは新しく生まれ変わることによって、これまでとは異なった価値観が与えられました。今まで私たちはこの世で認められることを願っていました。この世で成功することを求めたかもしれません。でも、イエス・キリストを信じたことによって、最終的な評価を下されるのは神であってこの方の前に価値あることをやっていると、生き方が変わったからです。皆さん、そうでしょう？

私たちは異なった人生観を持つようになりました。それまではこの地上のことしか考えていなかった。どうすれば自分を喜ばせることができるのかと、そのことしか考えていませんでした。しかし、私たちは生まれ変わるによって、どうすれば神に喜ばれるのかと、この地上のことよりもその先の永

遠を考えて今日を生きるようになったのです。私たちの目標も違うし、我々の夢も変わりました。どんなものを手にするかではなく、どんな宝を天に積むか？です。私たちは異なった主人に仕える者になりました。先に見たように、私たちはサタンに仕える者として生きて来ましたが、今度は神に仕える者になったのです。私たちがそのような歩みをしているなら、間違いなく、これまでの自分とも違うし、この世の人々とも違うのです。そのことを言っているのです。

「召された聖徒たちへ」、あなたがたはこの世の神を知らない神に敵対する者たちとは違う、あなたがたの生き方も違う、これまでとは違う生き方をする、これまでとは全く違う目標や目的を持って生きる者です。そんな人になったということ、これが救いだと私たちは何度も学んでいます。私たちは何度もこのように聖書が教える「救い」とは何か？とそのことを見ています。神が与えてくれる救いというのは、この救いに与った一人ひとりを新しく生まれ変わらせるものです。全く造り変えるものです。天国に行きたいからただ天国への切符をもらう、そうではありません。残念ながら、それは聖書が教えている救いではありません。何をもらうかではないのです。何を神にささげるかです。

皆さん、こんな質問を受けることがあります。「浜寺の教会員の中には、クリスチャンだと信じ込んでいる未信者はいませんか？」と。なぜこんな質問を受けるのかと言うと、私たちの教会ではこのことを頻繁に話すからです。救いとはいったい何なのか？と…。私たちが話すのは広い門ではありません。狭い門です。それが聖書が教えていることです。私たちはすべての罪人が救われることを望んでこのメッセージを語っています。しかし、救いは神のわざです。私たちは何とかして罪人を救うために信じ易い福音を語ろうとはしません。それは神のみこころに反することだからです。大変厳しいことを言っているかもしれませんが、それは神が言われていることである以上、私たちはそれを曲げてはならないのです。そうですね！皆さん。みことばが私たちに教えているのは、救いというのは神からのギフト、恵みであって、そして、この救いに与った人たちは生き方が変わるのです。罪を犯さないと言っているではありません。生き方が変わるのです。

皆さんに再びお尋ねします。「あなたの生き方は変わっていますか？あなたは新しい生活を始めましたか？あなたは神が喜ばれることを何よりも優先して生きようとしていますか？あなたにとって神が最も大切な存在ですか？」、これが聖書の教えだからです。なぜ、旧約聖書の時代から同じメッセージが語られて来たのか？「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と、新約の時代になってもイエスはこのように言われました。「私たちの愛する両親よりも自分自身よりもわたしを愛するか？」と、同じことを問われているのです。この私たちをお造りになった創造主なる真の神、この方を愛する者として私たちは造られたのです。そして、そのような者として生まれ変わったのです。一人ひとりが自分に問わなければいけないのは、そのような者として生まれ変わっているかどうか？です。そして、生まれ変わっているならそのようにして生きていますか？

形だけの信仰者を演じていませんか？みことばの中にはそういう人たちが存在していることが書かれています。みことばを聞いたなら喜んで受け入れるけれど、みことば故にいろんな迫害や困難が起こると神から離れてしまう。なぜか？信じていなかったからです。あなたの信仰は大丈夫ですか？確実に、今日、地上での生活が終わっても天国に行けますか？「召された」というのは神のわざです。そして、神が召した人を神はその人を新しく造り変えてくれるのです。

◎「召された者」とは？

今日のテキストを見ると、ユダは「召された方々へ。」と書いています。こうして、神はある人たちをご自分の元へと招いてくださった。そして、その人たちは「父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている、」と説明されています。

a) 父なる神にあって愛され : このことばは非常に訳しにくい独特の書き方がされています。先ず、

「～の中に、～のうちに」という前置詞があって、その後「父なる神」とあって、次に「愛された」とあります。この箇所は上手に訳されています。「父なる神にあって愛され」と。ユダが言いたかったことは、神によって召された人々、つまり、救われた者たちは、父なる神によってこの祝福に与ったのだということを強調するのです。というのは「愛される」という動詞は「受け身」で書かれているからです。あなたは神によって愛されたのだと。あなたが神を愛したのではない、神があなたを愛してくださったのです。Iヨハネの中のみことばを思い出しますね。4：10「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるので、」、まさにこのことです。神によってあなたは愛されていると。そして、神によって愛されたゆえに、その愛をもって愛することができる人へと生まれ変わったのです。

Iヨハネ4：10の後、4：19にも「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と書かれています。あなたがたクリスチャンは召された者であると語った後、実は、あなたがたはまず神によってまず愛され、神と特別な関係に入れられたと言うのです。この「あって」と訳されていることは「～の中に」という前置詞を使っていると説明しましたが、この前置詞は特別な関係を意味しているのです。つまり、神によって神の愛の中にあなたは招かれたのだ、だから、人を愛することができる、だから、神を愛することができる、そういう人へと生まれ変わったということです。愛の神があなたをその愛の中に招いてくださった、そして、そのことによって私たちも愛する人へと生まれ変わったのです。

b) イエス・キリストのために守られている : ユダがこのことばを敢えてここに記しているというのは、彼は読者たちのことをよく知っていたからです。最初に言ったように、教会の中には大変な異端が入り込んで来て、間違った教えをもたらして混乱を招いていました。その中にあるクリスチャンたちに対してユダはすばらしい約束を与えるのです。それは「キリストのために守られている」ことです。神ご自身がキリスト者を守り続けてくださるという意味です。そのことは24節にも出て来ます。「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、」と、ユダが言いたかったことは、いろいろな問題があるけれど神はあなたをしつかり守ってくれるということです。キリストのために召された者をキリストご自身が守ってくれるということです。

この「愛される」と「守られる」という動詞はどちらも完了形です。敢えて、この時制を使っているのは、このことはイエスを信じたときに始まったことだからです。信じたときにイエス・キリストの愛の中に入れられ、イエス・キリストの守りの中に入れられたのです。その過去に起こった出来事の結果が今も継続していると言っているのです。あなたはずっとこの神の愛の中に保たれているし、そして、神があなたをどんなことがあっても守り続けてくれる、こんな祝福の中に私たちは招かれた、神が私を召してくださったのです。このようなすばらしい祝福をくださったということをユダは記すのです。

◎ユダの祈り

2節には「ユダの祈り」が書かれています。「どうか、あわれみと平安と愛が、あなたがたの上に、ますます豊かにされますように。」と。ユダは読者たちがこの神の祝福によって益々豊かにされていくことを祈り願っていました。「あわれみ」「平安」「愛」とこの三つのことばにおいてということです。

(1) **あわれみ** : 繰り返しますが、私たちがこの救いに与ったのは神のあわれみのゆえです。エペソ書2：3、4に「:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、」と書かれています。私たちは生まれながらに神に逆らうことしか行って来ませんでした。神がしてはならないと言われることを継続して行ない、神がしなさいと言われることを行って来ませんでした。ですから、私たちは永遠の滅びに至る者です。神が私たちをご覧になったときに、私たちのどこを見ても救いに与る要素はゼロです。永遠の滅びこそがふさわしい者、それが私たちです。でも、神がその私たちをご覧になったときに私たちには救いが必要であると見られ、そして、救いを備えてくださり救いへと招いてくださったのです。これはすべて「神のあわれみ」です。テトス3：5に「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救って下さいました。」とある通りです。

そして、この「神のあわれみ」は、イエス・キリストの十字架で終わったのではなく、その後も継続して私たちと与えられ続けています。罪の赦しが必要だとご覧になった神は、それを備えて与えてくださった。ということは、私たちの日々の生活においても、あわれみ深い神はそのあわれみをもって必要を与えてくださるということです。あなたが今置かれているその状況をご存じである神は、ご自身のあわれみをもってその必要を満たしてくださると、そのことをユダは祈るのです。

皆さん、私たちは毎日の生活の中でいろいろなことを経験します。悲しいことも痛いことも辛いことも山ほどあります。時に、私たちはその中であって全く希望が見えなくなってしまうときがあります。先を見た時に、そこに見えるのはいろんな苦難、問題でしかない、そんなことがあります。絶望の中でもがいている、希望を失ってしまう、落ち込んでしまう。私たち信仰者はそのようなことを経験しないか？経験するでしょう。もし、そのように望むなら…。なぜ、このように言うのか？私たち信仰者は主を知らない人たちと同じようには生きないからです。私たちの神はあわれみ深い方です。私たちの弱さも愚かさも、私たちの抱えている問題もすべてご存じです。私たちに必要なことは、その神を見ることです。

エレミヤという預言者がいました。エレミヤもイザヤも大変辛い使命をいただきました。「みことばを語れ」と言われました。でも、語っても語っても人々は聞かない、やる気を失ってしまいそうです。けれども、彼らは忠実に主のみことばを語り続けました。南王国ユダは約束されたように神のさばきを受けます。エレミヤはその時に預言者としての働きをするのです。自分の愛する国が滅んでいく様子を見て、自分の愛する神殿が滅ぼされていく様子を見て、そして、自分自身も祈っても祈っても神が自分の祈りを聞いてくださらないと思えるそんな中です。これはすべてエレミヤの「哀歌」の中に書かれています。1章を見ても2章を見ても、彼の抱えている苦しみや問題が出て来ます。哀歌3：1-6「1 私は主の激しい怒りのむちを受けて悩みに会った者。：2 主は私を連れ去って、光のないやみを歩ませ、：3 御手をもって一日中、くり返して私を攻めた。：4 主は私の肉と皮とをすり減らし、骨を砕き：5 苦味と苦難で私を取り囲んだ。：6 ずっと前に死んだ者のように、私を暗い所に住ませた。私は主の激しい怒りのむちを受けて、悩みに会った者。」、彼はこのような外側だけでなく、内面においても大変な苦しみを抱えていたのです。そんな中、こんなことばが続くのです。3：22「私たちが滅びうせなかったのは、【主】の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」と。エレミヤは現状を見た時に悲しむことばかりでした。でも、エレミヤは自分の目を神に向けるのです。そして、彼が告白することは「私がこうして生かされているのはすべて神のあわれみだ。」と。

22節にある「恵み」とは「神の愛情」という意味です。私がこうして生かされているのは神が私のような者を愛してくださっているからだ、そして、その神の愛もあわれみも尽きることがない、終わることがないと彼は告げるのです。23節には「それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。」と、それは朝ごとに与えられ続けていくと言います。ですから、この後見ていくと、エレミヤは主に対する希望を告白するのです。

皆さん、抱えているいろんな問題ばかりを見ていくと私たちは希望を失います。でも、神がどんなお方であるのかを見る時に私たちは希望を持つのです。なぜなら、その方がすべてを支配しておられ、すべてのことを導いていってくださるからです。自分の思い通りにならないことがいっぱいあります。願っていないことがいっぱい起こって来ます。でも、その中であって私たちはこの方を信頼できるのです。エレミヤが言ったように、この方の恵みもあわれみも尽きることがないのです。こんな私に対して神は愛を与え続けてくれるし、こんな愚かな罪深い私にあわれみを示し続けてくださる、それが私たちの神なのです。

だから皆さん、あなたはそのような問題を全部抱えて悩むことができます。もし、それがあなたの選択なら…。でも、私たち救いに与った者たちは神に希望を置くことができるのです。あなたや私がしなければいけないことは、神を見上げることです。どんな神であるのかを思い出すことです。

(2) 平安： 次のことばは「平安」です。ユダが望んだことは、彼らが平安にあって豊かにされていくことです。神の平安のことです。どんなことが起こっても、私たちの心の中に平安が留まり続けるのです。でも皆さん、先ほども言ったように、神の平安をもってどんな時でも歩み続けることができるのですが、そうでない歩みをしている信仰者がたくさんいるのです。いろんなことを悩みながら、いろんなことを思い煩いながら…です。なぜでしょう？その問題を解決してくださる神のところに持っていないからです。あなたが一生懸命自分で抱えているからです。

パウロがこのように言っています。ペリピ4：6「：6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」と。みことばが教えていることは、あなたは自分で思い煩うこともできるけれど、その結果はあなた自身の背中に重荷としてどんと乗ってくるのです。悩み続けることもできるし、落ち込み続けることもできます。でも、そんな生き方はもうかつてのものであって私たちは新しく生きることができるのです。私たちは普通なら感謝したくないことでもまず神にあって感謝するのです。なぜなら、神は計画をもって進めてくださっているからです。そのすべてのことを神に知っていただきなさい、委ねていきなさいと言います。解決してくださるのは神だからです。その方のところに持っていくのです。

続けてペリピ4：7には「そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」と、「そうすれば」とあります。みことばは私たちがどうすればいいのかをこのように教えてくれます。でも残念ながら、多くの人たちはみことばを聞いたそのときはそう思っても、実際の生活においては全く違う生き方を選択をするのです。だから、残念ながら、何の祝福も得ることができないのです。ずっと自分で苦しみ続け悩み続けているのです。そんな生き方を望むのならそんな生き方もできます。でも、それは虚しい生き方であり、そんな生き方をしても神の栄光を現すことはできません。私たちはそのようなかつての生き方から救い出されて、この神のあわれみ

のうちに生きることが赦されたのです。なぜ、神のところに行かないのか？そこに神がいてくださるのに、その方が助けをくださるのに…。その方が私たちに平安をくださったから、平安をもって歩み続けることができるのです。

(3) 愛 : パウロはローマ5 : 5で「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」と言っています。彼が教えることは、

患難の中にあっても喜びをもってこの日を生きることができる、それが私たちクリスチャンだということです。そのために必要なことは「神の愛を覚えること」です。「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれている」と言います。キリスト者に与えられた聖霊が神の愛を私たちの心に注ぎ続けてくださるということです。「注ぎ続けられる」とは、それによって私たちは「霊的に元気を回復する」のです。それによって私たちは「励まされる」のです。私たちは落ち込んだときに思うでしょう？神は自分のことを愛してくれているのか…？と。でも、みことばを見ると、神は私たちのことを愛してくださっていることは明らかです。聖霊が私たちのうちに与えられ、その聖霊なる神が神の愛を私たちの心の中に注ぎ続けてくれる、あなたは愛されているのです。この完全な神によって愛されていると、そうして私たちの心を励ましてくれるのです。一人ぽっちではありません。みんなが見捨てたとしてもこの神はあなたを見捨てないのです。私のためにあの十字架という大きな犠牲を払ってくださった神が、あなたに対する愛を止めることはないのです。

ユダが望んだことは、この迫害下にある、困難の中にあるクリスチャンたちが、この祝福をしっかりと覚えて、この祝福にあって成長できるようにということです。そのような困難の中にあっても救われたことは喜びだ、神とともに生きることは幸いである、そのように告白しながら、そのように生きる者として彼らが益々成長していくようにと願うのです。ということは、あなたも私もそのような歩みができるということです。今あなたがどのようなことを経験されているのかは分かりません。しかし、どんなことを経験しても、その中であなたは神を称えることができるし、その中であって神の祝福をもって生きることができるのです。

この祈りは、私たち自身もすべき祈りだと思いませんか？「神さま、どうか、私があなたのあわれみにおいて平安において、そして、愛において変えられていくように。その祝福が私の上に注がれることによって私がもっとあなたを信頼して、どんな時にもあなたを期待して、どんな時にもあなたに従っていく、そのような信仰者に変えられていきたい。」と。そのような歩みが可能なのです。主が与えてくださった祝福を覚えることです。そして、それを感謝して主に従い続けることです。主はあなたを見捨てているわけではありません。むしろ、あなた自身が主を見捨てているのかもしれない。

見るべき方をしっかり見ることです。約束はこのみことばの中にあるのです。そこに立つことです。そのときに私たちは神の働きに期待することができます。そうして歩んでいきましょう。